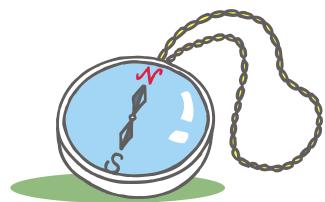


羅針盤

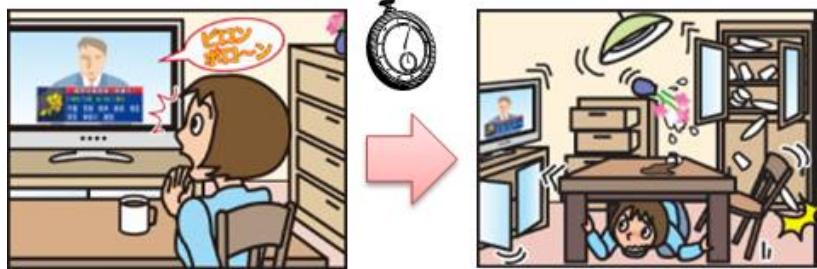


第32号

令和3年(2021年)1月18日(月)

◆ 「落ちてこない」「倒れてこない」場所に避難

今から26年も前の、1995年1月17日、阪神・淡路大震災が発生しました。戦後初と言われる大都市直下型地震は、関連死を含めて6434人の命を奪い、住居だけでなく仕事や暮らしていた日常の全てを奪い去ってしまいました。住まいや水道、電気などのライフライン、そして、道路・鉄道にも甚大な被害をもたらしましたが、またその一方で、ボランティアによる支援や、心のケアなどの人と人との繋がりの大切さを実感することができる場面が増えたのも事実です。もしも、また大きな地震が起きたときに、十分な準備が本当にできているのか、この機会に今一度見直す必要があるのではないかと思います。大きな災害が起きたときに、慌てることなく行動をとることができるかどうか、避難の方法も火災と地震では大きく違うと言われています。大きな地震が起こった際には、最大震度5以上と推定される地震で、強い揺れ（震度4以上）が予想される地域には、気象庁がテレビやラジオなどを使って「緊急地震速報」を流すことになっていますが、強い揺れが到達するまでの時間は、数秒から長くても数十秒と極めて短いため、直ぐに避難行動をとる必要があります。机や椅子などの下に身を隠し、落下物が「落ちてこない」そして「倒れてこない」場所に、素早く自分自身で判断して避難する必要があります。学校で活動をしているときも、放送の指示を待っているような余裕は決してありません。自分自身の身の安全は、自分自身で確保する必要があります。地震で大きな揺れが起こっているときには、助けに行きたくても、誰も助けに行くことができないです。とりあえずは、落下物から身を守るために、自分で頭を保護しながら安全な場所に身を寄せることが最優先となります。地震の揺れが治まっても、あわてて外に飛び出すようなことはしないで、扉を開けて避難路を確保することが必要です。地震は、ある日、突然、何の前ぶれもなく襲ってきます。「緊急地震速報」が流れた後、実際に激しく揺れ出すまでのわずか十数秒の間にできる頭を守るための咄嗟（とっさ）の行動で、被害をできるだけ少なくできることが明らかとなってきています。関東圏に比べて、近畿地方は比較的地震が起こることの少ない地域ではあるかもしれません、南海トラフ地震が少なくとも20～30年以内にはかなり高い確率で起きてしまうと専門家の研究者たちは口をそろえて言います。防災グッズを揃えて持ち出せる準備をしておくことや、被災後の集合場所や連絡方法（ただし、緊急時はお互いに連絡を取り合うことが難しくなることが多いです）を確認しておくことも必要なことです。地域の緊急避難場所には、小学校や中学校が指定されていると思います。もしもの場合には、学校が地域の避難所となる役割を担っています。これまで起きた地震で学校の校舎が倒壊したような事例はほとんどなく、耐震補強がなされているからだそうです。（だからと言って、100%間違いなく倒壊しないという訳ではありません。）地震が起きたときには、「落ちてこない」、「倒れてこない」場所へ避難することをくれぐれも忘れずに、少しでも落ち着いた行動がとれるよう心掛けてください。



強い揺れまでの時間はわずかしかありません

